

生涯学習のニーズに対応するeラーニング大学

向後 千春¹⁾

生涯学習の方法の1つとしてeラーニングが期待されている。eラーニングの一般的な長所は、時間と場所の制約を超えた学習を可能にすることといわれている。本研究では、このような長所を備えたeラーニングが、これからの生涯学習のニーズにどのように対応できるのかということを検討する。eラーニングによる社会人向けの学士教育の中心的な年代層が30~40代であるということから、それが単に知識やスキルを身につけたり、資格を取得したり、あるいは学士号を取るために、大学に入ってくるだけではないということを指摘した。その根源的なニーズは人生の後半に向けた、自分自身の発見と個性化ということに深く関わっている。それを踏まえて、eラーニングによる社会人向け学士教育はそうしたニーズに対して、(1)eラーニング学習のための基礎スキルをサポートすること、(2)基礎理論から最先端までを自分のスケジュールに合わせて学べること、(3)研究そのものが実践現場に結びついていること、(4)オンライン共同体を形成できること、という観点で対応する必要があることを指摘した。

キーワード

生涯学習, eラーニング, 成人教育学, 学士教育, eスクール

1. はじめに

日本の大学は、社会人を積極的に取り込もうとしている。社会全体としても、リカレント教育や生涯教育のニーズは大きくなりつつある。また、専門職大学院に見られるように、専門性に磨きをかけ、現場の仕事に活かしていくというニーズも大きい。こうしたニーズに応える形で、大学は二十歳前後の学生だけでなく、成人を対象とした教育を用意することが求められている。

eラーニングの一般化は、社会人学生が大学に参加することを容易にし、促進している。つまり、eラーニングによって、職を持ったまま、在宅で大学教育を受けることができるからである。フルタイムの学生を中心として考えられた、対面による授業形態とともに、こうしたeラーニングの形態が今後ますます増加していきだろう。そしてその恩恵を最も受けるのは社会人学生である。

1.1 eラーニングによる社会人向け学士教育

インターネットが整備され、光ファイバーなどのブロードバンド通信環境が充実するにつれて、日本でも、ほとんどの授業をeラーニングによって実施する大学が開設されてきた。その先駆的な例が、2003年4月に開設された早稲田大学人間科学部通信教育課程(以下eスクールと呼ぶ)と、2004年4月に開設された八洲学園大学、

そして、2007年4月に開設されたサイバー大学である。

eスクールは2003年4月に、早稲田大学人間科学部通信教育課程として、人間環境科学科、健康福祉科学科、人間情報科学科の3学科構成で開設された。2009年4月現在、約850人の学生が在籍している(西村, 2005, 2007; 早稲田大学人間科学部eスクール, 2009)。

八洲学園大学は2004年4月に、生涯学習学部生涯学習学科(人間開発教育専攻および家庭教育専攻)の1学部1学科構成で開設された。2009年9月現在、1711人の学生が在籍している(八洲学園大学, 2009)。

サイバー大学は2007年4月に、IT総合学部と世界遺産学部の2学部構成で開設された。2008年10月現在(つまり2学年で)963人の学生が在籍している(サイバー大学, 2009)。

eスクール、八洲学園、サイバー大学とも、eラーニングによる学習だけで卒業できることをうたっている。eスクールと八洲学園の在学生の年齢層を比較してみると、図1に示すように、eスクールでは30代と4代が中心、八洲学園では20代と30代が中心になっている。また、在学生の職業のデータによると、eスクールでは80%以上が有職者であり、またサイバー大学では60%以上が有職者である。

¹⁾ 早稲田大学人間科学学術院

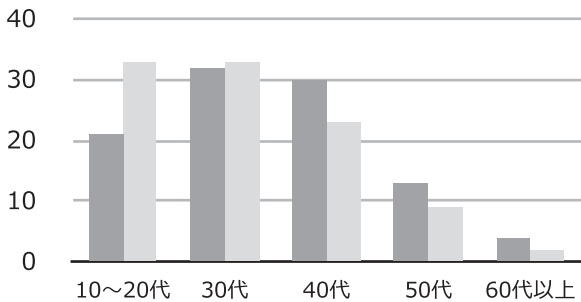


図1 早稲田大学eスクール（濃い棒）と八洲学園（薄い棒）の年齢層別学生数の割合（%）

図1では、eスクールと八洲学園の年齢層の切り方が異なっていたため、10~20代をひとまとめにしたが、両者に共通なのは30歳代の学生が中心を占めているということであり、また、eスクールでもサイバー大学でも6~8割が有職者であるということが特徴である。つまり、eラーニングによる社会人向け学士教育として設立されたeラーニング課程・eラーニング大学は、その目的の通り、社会人を中心として学生を集めている。

一方、eラーニングを主たる教育手段としない伝統的な通信教育もまた、印刷教材とレポート提出だけというのではなく、新たにeラーニングによる授業を展開しようとしている。たとえば、日本大学通信教育部では、伝統的な印刷教材による学習とスクーリングに加えて、「メディア学習」と呼ばれるインターネットによるオンデマンド授業を実施している。これは、ビデオオンデマンドによる授業の視聴と、BBSによるディスカッションを経て、テストあるいはレポート作成によって授業を完結させるものである。

1.2 eラーニングによる社会人向け大学院

フルeラーニングによる学士教育はまだ数えるほどである一方、eラーニングによる社会人向け大学院は数多く開設されている。これは、学士課程に比較して、開設するために必要な教員が少なく済み、また、学生数も学士に比べて十分の一以下であるため、開設にかかる初期費用が少なく済みためである。その中から、熊本大学大学院教授システム学専攻のケースを紹介する。

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻は2006年に開設され、現在は博士前期課程と博士後期課程を持っている。その特徴は、特定非営利活動法人日本eラーニングコンソシアムより、eラーニング・プロフェッショナル資格の相互認定教育機関として指定されていることである。これにより、博士前期課程修了者は「ラーニングデザイナー」資格を取得できる。

このケースは、専攻そのものがeラーニングを扱ったものでもあり、そのコンテンツ作成にあたっては作成プロセスのマネジメントおよびレビュー体制（「FESTA」、

北村他、2007）も整えられている。

1.3 問題提起

以上見てきたように、eラーニングによる大学学士課程および大学院は、その特徴をうまくいかすことにより、社会人を多く受け入れて発展しつつある。しかし、その一方で、既存の高等教育にeラーニングシステムを導入するという単純な方法では問題が起こることも予想される。そこで、本論考では、次のような問題を設定し、その回答を考えることにより、eラーニングによる高等教育を今後どのように変えていけば、より良い生涯学習を実現できるのかということを考えてみたい。

1. eラーニングによる高等教育に対する社会人のニーズはどこにあるのか
2. eラーニングによる高等教育はそのニーズに対してどのように応えられるか
3. もしその対応が不十分だとしたら、どのように変えるべきか

2. 生涯学習に対するニーズ

eラーニングによる高等教育に対する社会人のニーズはどこにあるのかについて考えたい。ニーズのタイプをまとめれば、次のように列挙できるだろう。

1. 大学を中退または進学できなかったため
2. キャリアアップ・起業・転職のため
3. 退職後に人生を充実させるため
4. 趣味・教養として楽しむため

しかし、2, 3, 4番のキャリアアップや退職後の充実、趣味・教養としてのニーズに対しては、大学はあくまでもたくさんの種類の教育機関の中の選択肢のひとつに過ぎないし、むしろそうしたニーズに対しては、最適な場所であるとはいいいにくい。また、1番の大学を卒業できなかった人が再度挑戦するというニーズも重要ではあるけれども、消極的な理由である。では、eラーニングによる社会人向け大学教育の特徴的でユニークなニーズはどこにあるのだろうか。

2.1 「人生の正午」からのニーズ

すでに図1に示したように、eラーニングによる社会人向け大学の学生層の中心が30~40代であることを考慮すると、その世代のニーズを把握することが必要だろう。その世代は職場の中では中堅からベテランの立場になる頃である。世の中のしくみを把握し、職場の中の人間関係の難しさを理解し、子育てや家族の問題に悩みながらそれを解決しつつある時期にあたる。そうした状況の中で、自分の人生の十年後、二十年後を考えないわけにはいかない。このまま進んでいくのか、何らかの転機を自ら計画していくのか。

C. G. Jungは、40歳を「人生の正午 (the meridian of his arc of life)」と呼んだ(河合, 1967)。この意味するところは、40歳以降の期間を、人生後半に起こる衰退ではなく、さらなる成長と発達を起こす時期として捉えるということである。40歳までが、働くことにより社会的地位を築くための期間、また、愛により家庭を築くための期間であるとすれば、40歳以降は、それまでは少なからず抑圧せざるをえなかった、本来の自分の発見と個性化のためにあるとしている。

この枠組を採用すれば、生涯学習は生涯発達のプロセス上の必要性から来ている。現在、会社で働いているとして、その中であつても、十年後にやりたいことを見通して、それを考えるための基礎を得る場所が必要である。その場所が、eラーニングによる大学である。それは単に知識やスキルを身につけたり、資格を取ったりすることでもなく、さらには単に学士号を取るということでもなく、「本来の自分の発見と個性化」を準備するための場所として求められている。それは、「自分探し」という言葉で表されるような宙に浮いたものではなく、自らが生きている現実の社会に対して、自分自身がどんなつながりを持ち、どんな貢献ができるのかという問いかけの答えとして「本来の自分」を発見しようとしているのである。そして、そうした問題を同じように考えている仲間との出会いも提供するような場所であつて欲しいと考えられる。

「本来の自分の発見と個性化」は自分を見つめるだけでは果たすことができない。むしろ、最先端の知識とスキル、問題を深く掘り下げて、その解決策を探すという行為こそが、自分の発見のために避けては通れない道である。若いときには大学にいたとしても、それがわからないままに卒業してしまう。それはそれで何らかの意味があるかもしれないけれども、社会人になってから入る大学にはそれとは違う新しい意味がある。つまり、人生をロングスパンで見たときに自分自身を考え直し、新しいプランを実行するための受け皿でもあり、準備をする場所でもあるということである。

以上、人生の転換期からのニーズとして「本来の自分の発見と個性化」の大枠について示した。次に、それを可能にするためには具体的にはどのような条件を描く必要があるのかについて、その詳細について考えたい。

2.2 理論・体系・最先端につながる

まず1番目の条件は、理論・体系・最先端につながるということである。

現場から大学に入学しようとする社会人は、理論を求めている。現場では、伝授されるノウハウや共有される工夫、そして蓄積されたマニュアルによって業務が動いている。しかし、そこには理論は明示されない。ノウハウや工夫がなぜそれでうまく働くのかということを根拠

づけるものは語られない。それは通常「机上の空論」という名称で退けられるものである。そして机上の空論を振り回す人はしばしば「頭でっかちの人」、「使えない人」として現場から排除されていくのである。

しかし、一度自分の仕事を問い直してみると、一体それは何なのかという答えは現場にはない。その答えを与えるものは、理論である。さらにいえば、素人の理論や素朴理論ではなく、科学に基づいた理論である。科学に基づいた理論がなぜ社会人に必要かという点、それは自分が従事している仕事に意味を与えるからである。

個別の理論のそれぞれの位置と関係を与えるものが体系である。体系は理論の順序構造と階層構造について説明したものである。個々の理論が正しいとか間違っているとすることはない。それぞれの理論は、適切な領域に対して、適切な条件下で適用されれば正しく動くように組み立てられているからである(正しく動く領域がなければそれは理論としては成立していない)。そうした理論同士の関係を記述したものが体系である。つまり、体系は世界全体のパースペクティブを与えるものである。世界をどのように切り取り、個別の理論を当てはめるかという指針を与えるものが体系である。

このような理論の集合と、その全体像を与える体系がわかってくることによって、どの部分が最先端の領域であるのかが見えてくる。最先端とは、最も先鋭的な応用の部分でもあり、また最も基礎的な部分でもある。個々の理論とそれらを順序づける体系、そしてそれによって見えてくる最先端の領域を知ることによって、社会人学生は、自分が今依って立つところがどこなのかということを知ることができる。そして、そのことによって、自分が従事している仕事の位置づけができる。それはつまり、仕事の意味がわかるということである。

仕事の意味は、現場の中ではなかなか気づくことができない。現場は常にルーチンワークに支配されているし、創造的な仕事とされていることでさえ、それが変化なく続けばルーチンワークになってしまう。仕事の意味を知るためには、それを外から見る必要があるのである。それもただ外から見るだけではなく、理論やその体系という枠組みが必要となる。そしてその最先端領域においては、それがどんな領域であれ、生きることの意味に何らかの形でつながってくるのである。

2.3 実社会につながる

2番目の条件は、実社会につながるということである。

前節で、社会人学生は、自分の仕事を再定義するための理論と体系を求めているということ述べた。しかし、そこで求められている理論と体系は空中に浮いているものではなく、自分の仕事や職場につながっているものでなくてはならない。つながっているといっても、それは、仕事や職場にとって直接的に役立つという意味ではな

い。そうではなく、自分の仕事への新しい見方を提供するものであったり、まったく新しいアイデアを提供するものであったりすることが期待されている。

この意味で、理論と体系を提供する側には、それが仕事や職場でどのように適用できるかということを説明する準備ができてることが求められている。もちろん最終的に理論と実社会のつながりを発見するのは学生自身の仕事である。そうでなければ大学で学んでいる意味はない。しかし、教員の側にも、そうしたつながりを探っていく行為を手助けすることが必要なのである。その意味では、教員もまたそこで理論の新しい応用のしかたを探り、学んでいるともいえる。

2.4 仲間とつながる

3番目の条件は、仲間とつながるということである。

大学には、同時代に生きる仲間とつながる機会が用意されている必要がある。その仲間とは、職場の同僚でもなく、同じ地域の住民でもなく、家族でもない人々である。たまたま同じ時期に、同じ志を持った集団として、お互いを仲間として見出すのである。

仲間とつながることの意味は、同じ指向性を持った人を見つけ、そうした人との対話をきっかけとして、考えを深めるという点にある。同じように理論と体系を学んでいる同志として意見を交わすことによって、新しい視点を獲得することができる。それは、先生と呼ばれる人から学ぶだけでは得られない、多面的な考え方を学ぶことに役立つだろう。

3. 成人学習者の特徴

以上、「本来の自分の発見と個性化」へのニーズに対して大学がどのような条件を揃える必要があるのかについて見てきた。30～40歳台という人生の正午の時期に、大人は、本来の自分の発見という新しいタスクに気づく。それは別の言葉で言えば、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）とも言える。しかし、単なるバランスではなく、仕事に対しても、また生活に対しても、それらに新しい意味を与えるものが必要なのである。それを探ることができる場所として、社会人にとっての大学の新しい価値が生まれてくる。今の自分にできないこと、今の自分にはないものというギャップを埋めるのではなく、そのギャップは一体何なのかということを見極めるための場所である。

3.1 成人教育学の考え方

日本の大学は、こうした社会人を積極的に取り込もうとしている。しかし、このような大人の学びは、二十歳前後の大学生の学びとは大きく違うものである。

Knowles (2002) は、こうした大人の学びを子どもの

学びとは区別して、「成人教育学 (andragogy)」と名づけた。そして、成人教育学を「成人の学習を援助する技術と科学 (the art and science of helping adults learn)」と定義した。

しかしながら、日本では成人教育学が専門領域として確立し、成果を上げる段階までには至っていない。渡辺 (2002) は次のように書いている。

日本では現在に至るまで、「おとなが学ぶ」ことが、子どもの学習とは違った価値や意味をもつというような考え方や価値観が、あまり共有されてこなかった。それゆえ、成人学習者の立場に立って「おしえる」技術や学習援助のための専門性を確立していく基盤が、日本社会には形成されにくかったのである。

今後、成人教育学が理論と実践の進展を見せれば、それは大学教育全体の改善にとっても大きな力となるだろう。なぜならば、成人教育学はただ成人に教育することについての知見を与えるだけではなく、青少年への教育にもうまく適用でき、それを改善する可能性があるからである。Knowles (2002) は次のように示唆している。

当初私は、アンドラゴジーを「成人の学習を援助する技術と科学」(the art and science of helping adults learn) と定義し、ペダゴジーを「子どもを教える技術と科学」と定義した。その後小中学校（そしてわずかではあるが大学でも）の教師の多くが、私に次のような報告をしてくれた。すなわち、アンドラゴジーの概念を青少年への教育にあてはめる試みをおこなったところ、ある状況においては、それがすぐれた学習を生み出すことがわかったということである。

Knowlesは、成人学習者の特徴として、目標指向的で、実用を重視すること、人生経験からの確信を持っていること、そして、自己決定性があることを挙げている。以下にそれらを見ていく。

3.2 目標指向性と実用重視

成人学習者の特徴の1つ目は、目標指向的であり、実用性を重視するということである。子どもの学習が教科中心であり、カリキュラムを中心として設計されているのに対して、成人学習者は、生活中心であり、現場で起こっている問題を解決するために学ぶという特徴がある。学ぶ目的が明確であり、これを解決したいので大学で学びたいという実用性を重んじている。

3.3 人生経験を学習資源とする

成人学習者の特徴の2つ目は、自分の人生経験を学習資源とすることである。子どもは、学校というシステムの中で、教科書と教師の経験が語られたものから多くを学ぶ。その一方、成人はすでに自分自身で豊かで多様な

経験を持っている。その経験自体が自分の学習の資源になっている。つまり、学習したものはすぐに自分の経験知の中で咀嚼され、検討される。これは、学習内容の転移という意味では非常に効率の良いものであるが、その反面、自らの人生経験の枠組みが強固なものである場合は、新しく提示された学習内容が受け入れられないということも起こりうる。

3.4 自己決定性

成人学習者の特徴の3つ目は、自己決定性である。成人学習者は、何か新しいことを学ぶ場合に、それを「学ぶ必要」があることをまず知る必要がある。これを知った上で、自分はこれを学ぶのかそうでないのかを自分で決めることができる。これを自己決定性と呼ぶ。これは、以上に述べた、目標指向性と実用重視という考え方、および人生経験を学習資源にできるということの上で、自分で決めることができるということである。

4. 生涯学習のニーズに応えるeラーニング

ここまで、社会人学生の「本来の自分の発見と個性化」というニーズ、そして成人教育学という視点にたった成人学習者の特徴について見てきた。この2つの論点を重ね合わせ、実現していくためには、大学は幅広く、細かなサポートをしていく必要がある。そして、それにはeラーニングというシステムが必要不可欠である。

生涯学習にeラーニングというシステムが必要なのは、eラーニングが単に、いつでも、どこでも、仕事に従事しながらでも学習できるからという理由ではない。それはあくまでも生涯学習の必要条件であり、十分条件ではない。eラーニングによる生涯学習の十分条件と考えられるのは、(1)eラーニング学習のための基礎スキルをサポートすること、(2)基礎理論から最先端までを自分のスケジュールに合わせて学べること、(3)研究そのものが実践現場に結びついていること、(4)オンライン共同体を形成できること、以上の点が考えられる。以下に詳しく記述する。

4.1 eラーニング学習のための基礎スキル

eラーニングによる生涯学習におけるつまづきの多くは、基礎的な学力とパソコンスキルの不足に起因するものである。基礎的な学力とは、具体的には、論文・レポートの書き方や、学術的な英文の読解能力、データ分析に必要な統計手法の習得などである。またeラーニングには欠かすことのできないパソコンスキルには、ワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの使い方が含まれる。さらにより基礎的なスキルとして、インターネットでの情報検索、メールの読み書き、Skypeなどによる音声交信やテキストチャットなどのス

キルが必要になってくる。

以上のような基礎スキルを習得させるためには、このような内容を扱った科目を立てて必修とするか、あるいは、いつでもアクセスできるようなコンテンツとして整備することが必要である。後者のケースでは、学生は必要に応じて基礎スキルコンテンツにアクセスし、そのつど学んでいくことになる。また、教員は必要に応じて基礎スキルコンテンツにアクセスするように指示する。

eラーニングにおいて、メールやBBSのような文字ベースのコミュニケーションによってお互いの意思疎通を図ることはなかなか難しい。丁寧に長い文章を時間をかけて書いたとしても、それがかえって誤解を招くこともあり、かけた時間と労力のコストに見合わない。総じて、細かいニュアンスや感情的な側面を文章で伝えるのは困難である。したがって、BBSでは、話し合ったことや質疑応答の内容を記録として残しておくという使い方を中心にするべきだろう。

コミュニケーションの多くの部分は、スクーリング時に実際に対面して話し合ったり、インターネットを利用した電話(Skypeなど)や、テキストチャットを利用するのがよいだろう。インターネットを利用したコミュニケーション手段は、参加者が同時にログインする必要があるけれども、短い時間で細かいニュアンスを含めた情報を交換することができる。したがって、お互いに時間帯を調節するための煩雑さはあるとしても、コミュニケーションについての満足度は高くなるだろう。

4.2 基礎理論から最先端まで

生涯学習では理論と体系を学ぶことで最先端につながり、そのことによって自分の仕事や職務を捉え直すことができる(2.2節参照)。理論と体系を学ぶためには、基礎的な知識とスキルの土台が必要である。しかしながら、一度学校教育から離れた後でそれを取り戻すのは、簡単なことではない。そのためには基礎トレーニングの機会の充実が必要である。

たとえば、レポートの書き方や統計学のような科目では、基礎的なトレーニングの繰り返しが中心になる。こうした科目では、知識を吸収するだけでは不十分で、実際に自分自身が練習し、指導を受けるというサイクルを何度となく繰り返すことが必要である。そのために、このような基礎的なトレーニングができるようなeラーニングが必要である。さらに言えば、大学を卒業した後でも、このような基礎的なトレーニングが実際に必要な時期が来たら、再び授業内容にアクセスし、練習したり、指導を受けたりすることができるような場が必要とされている。

現在の大学でも、ライティングセンターなどの名称で、レポートや論文の書き方についての助言指導のサービスが行われている。また図書館ではリファレンス・サービ

ス業務が行われている。生涯学習のためのeラーニングは、こうしたサービスをオンライン上で実施できるようにする必要がある。

こうした基礎的なトレーニングを提供する一方で、学問領域の最先端につながるようなeラーニングを提供する必要もある。

大学の授業では同系統の科目でも、入門レベル、基礎レベル、応用レベルと分かれている場合がある。しかしながら、このようにレベル分けされた科目は、基礎的・中核的な科目に限られており、多くの科目では、単体のまま開講されているのが現状である。とはいえ、ある科目を履修した学生の中には、さらに深いレベルの知識や技術を学びたくなったという人も多い。このような場合の受け皿となるようなeラーニングコースを考えておく必要がある。これは、授業内で扱った内容に加えて、発展的な内容、応用的な内容、関連性のある内容についてフォローする。

これは、この後、4.4節で述べるような、オンラインコミュニティを作り、そのなかで、授業内容から展開した話題について継続的に議論するような場を提供することで実現できるだろう。このような場は、授業内容に興味を持ち、さらに深い議論をしたいという学習者が一定の人数存在する限り、有効に働くだらう。また、そこでの活動をきっかけとして、研究者への道も開ける。教員としても、自分の専門のコミュニティへの入口としての役割を担わせることができるだろう。

4.3 実践現場に結びつく

大学の授業で扱う内容はシンプル、コンパクトにまとめられていることが多い。しかし、現実社会ではそれ以上に複雑な現場が多く、また時代とともに速いスピードで変化している。この社会変化に対応して授業の内容がアップデートされる必要がある。また、逆に変化するものをフォローすることによって、変化しないものが浮き彫りにされ、そのことによって学問の中心部分がはっきりと浮かび上がるという効果も期待できる。

前節で述べたように、生涯学習では基礎理論から最先端までをカバーしなければならない。と同時に、研究が実践現場に結びついていなければならない。これはただ役に立つことを教えなければならないということではなく、逆に、実践現場に役立つためには、回り道しなければならないという意味である。「すぐに役立つものはすぐに役立つなくなる」と言われるように、本質的な解決にはその根っこまでさかのぼって理論を探さなければならない。逆に、そうした理論は実践現場で試されることによってその有効性と妥当性が検証されるのである。

したがって、eラーニングによる生涯学習においては、実践現場の問題を中心に切り上げ、そこに最先端の理論を持って切り込んでいくような授業が展開されることが

期待されている。具体的には、ケーススタディや問題解決型の学習方法を使ったり、学習者の豊富な人生経験が生きてくるようなオープンエンドの質問を使って授業を設計することなどが考えられる (Green, 1998)。このようにすることで、職場や現場の切実な問題を解決し、またそのことで理論の発展も期待できる。

社会人は人生経験が豊富なので、一般的に、学ぶことへの意欲と動機づけが高い。これは良い特徴であるが、その反面、自分の考え方に固執し、外からの指導や助言を受け入れにくいということも起こりうる。それは、専門的な研究者である教員も同じ特質を持っているわけであり、もし両者が互いに譲らないという状況であれば、指導はうまくいかない。このようなことを回避するためには、互いに柔軟性とオープンさをもって臨むことが必要である。たとえば、社会人学生自身の職場における問題をテーマとして取り上げ、それを研究的な側面から分析していき、最終的には改善の提案まで持っていくことができれば、学生自身としても満足のいくものになるだろうし、また教員も自分の研究知見に対して、新たなものを付け加えることが期待できる。

4.4 オンライン共同体の形成

eラーニング学習におけるドロップアウトの原因の1つは学習者の孤独感である。逆にいえば、eラーニングコースにおいて学習者同士、そして、学習者と教員・メンターの間適切な人間関係を築くことができれば、孤独感を減らし、学習に対する持続的な動機づけをもたらすことができる。

学習者同士、学習者と教員・メンターの間適切な人間関係を築くためには、そのためのコミュニケーションチャネルを開いておく必要がある。そのためには、(1)ソーシャルネットワークワーキングシステムの環境、(2)Skypeなどの1対1あるいはグループでの通話やチャットの環境、(3)懇親会やサークル、地方会などの機会を利用したりリアルな交流を用意しておく、といった環境の整備が必要である。以下、それぞれについて記述する。

学生同士のオンライン上の交流を進めるには、ソーシャルネットワークワーキングシステムの導入が効果的である。これは日記やつぶやきなどを通じて情報の交換をすることで、一緒に学んでいる仲間を浮かび上がらせるものである。また、同じ科目を履修していたり、共通の趣味を持っていたり、共通の職種に従事しているなどといったきっかけによって、学生同士に何らかのつながりを生み出す。このようなシステムを利用することで、単に友人を作るということだけでなく、同じ職種に従事するもの同士の情報交換や、人脈の形成などが期待できる。

次に、Skypeなどの1対1あるいはグループでの通話やチャットの環境もまた重要である。こうしたパーソナルな情報交換ツールは、パソコン上で多くの学習活動を

しなければならないeラーニング学習者にとって必要不可欠なものである。勉強しながら、ちょっと疑問に思ったことなどをチャットとして他の学習者に投げておけば、ある確率で返事が返ってくる（もちろん無視されることもあるけれども）。これはあたかも、教室で隣に座っている学生に「今、先生が言ったことはどういう意味なの？」とこっそり聞くようなものであるかもしれない。そして、そのような小さなコミュニケーションが学習を促進することもある。また、何より仲間とともに学んでいるのだという感覚を強く持つことになるだろう。

最後に、懇親会やサークル活動、地方での会合などの機会を利用したりリアルな交流を用意しておくことも重要である。もちろんフルeラーニングを前提とした大学では、学生が日本全国に散らばっており、また学生が海外在住であることも珍しくはないので、こうした特定の場所での集まりには参加できない人も多い。とはいえ、このような機会を多く提供することは、オンライン上の人間関係を強化するだろう。長らくオンライン上だけで議論していた人同士が、実際に対面することで、より強い絆ができることはしばしば体験されることである。

5. 展開

以上見てきたように、eラーニングを利用した生涯学習は、単に既存の大学授業をインターネットに移し替えたものではない。eラーニングが社会人向けの生涯学習に適用されることによって、その構成内容と教育方法は既存の教室をベースとした授業では実現不可能なものであり、大学教育を拡張したというよりも、まったく新しいものになっていると言えるだろう。

最後に、社会人のためのeラーニング大学がさらに特色を出せるような展開を以下に示す。

5.1 アクティビティ成果の蓄積と公開

授業の中で生産されたレポートやプレゼンテーション資料といった学生のアクティビティの成果物はたいていはそのままにされ、再活用されることはめったにない。むしろ、レポートを学生間でコピーされることを怖れて外部には出さないようにされている（このため逆に、レポートの共有サイトが流行っているのは皮肉である）。しかし、これとは逆に、レポートやプレゼンテーション資料といった成果物を積極的に公開し、それを他の人が活用できるようにすることが必要である。また、いったん公開された成果物に、評価（レイティング）やコメント、質疑応答の場所をシステム側から提供することにより、これらの成果物をさらに成長させることを意図している。このようにすることで、大学の課程で書かれた成果が社会に還元される道が開けるだろう。こうすることによって社会人学生と社会を意味のある形で結びつけよ

うとするのである。

5.2 オープンなコミュニティ

特定の大学の在籍学生や卒業生だけではなく、すべての人々をコミュニティの仲間として迎えることのようなシステムがインターネットを使えば可能になる。たとえば、MITはオープンコースウェアという名称で、すべての授業を公開している。オープンコースウェアにアクセスした全世界の人々はMITをハブとしてコミュニティを形成する可能性を持っている。この事実から考えると、eラーニング大学は自分の大学の授業を完全に公開し、しかも、そこにコミュニティを作ることによって、自らの大学の広報活動にもなり、同時に社会貢献をすることにもなる。

5.3 長期に渡る教育

eラーニングを導入している大学であっても、いまだなお在籍年限などはまだそのままの制度を引きずっている場合がほとんどである。これでは、eラーニングのキャッチフレーズである「いつでもどこでも学習できる」ということにはならない。実際はeラーニングの最大の利点は、学習時間を自分でコントロールすることが可能な点にある。たとえば、長期に渡って研究のためのデータを収集する一方で、時期が来たら、短期集中的に指導を受けつつ論文化するというようなコントロールができるというようなことである。しかし、これを実行するためには指導のコストがかかる。そのためにeラーニングの大学であろうとも在籍年限などの条件を従来のままにしてあるのである。将来的にはこれを技術的に解決することで、タイムスパンのコントロールができるようになるのではないかと期待される。

6. 結論

30～40歳代の社会人のニーズに対応したeラーニングによる生涯教育が求められている。この世代のニーズは、キャリアアップ・起業・転職のためや、趣味・教養として楽しむためではなく、人生の転換期において、「本来の自分の発見と個性化」を実現するための機会を得ることにある。そのためには、成人教育学で提示されている成人学習者の3つの特徴、つまり、目標指向的で、実用を重視すること、人生経験からの確信を持っていること、そして、自己決定性があることに対応したeラーニングを設計することが必要である。具体的には、(1)eラーニング学習のための基礎スキルをサポートすること、(2)基礎理論から最先端までを自分のスケジュールに合わせて学べること、(3)研究そのものが実践現場に結びついていくこと、(4)オンライン共同体を形成できること、が考えられる。

引用文献

- サイバー大学 (2009). 学生数/教員数 <<http://www.cyber-u.ac.jp/outline/number.html>> (2009年10月28日)
- Green, J. (1998). Andragogy: Teaching adults. In B. Hoffman (Ed.), *Encyclopedia of Educational Technology*. Retrieved 2005/03/31 from <http://coe.sdsu.edu/eet/Articles/andragogy/start.htm>
- 河合隼雄 (1967). ユング心理学入門 培風館
- 北村士朗・鈴木克明・中野裕司・宇佐川毅・大森不二雄・入口紀男・喜多敏博・江川良裕・高橋幸・根本淳子・松葉龍一・右田雅裕 (2007). eラーニング専門家養成のためのeラーニング大学院における質保証への取組: 熊本大学大学院教授システム学専攻の事例 *メディア教育研究*, 3(2), 25-35.
- Knowls, M. S. (2002). 成人教育の現代的実践 (堀薫夫, 三輪建二訳) 鳳書房
- 西村昭治 (2005). e-Learningによる大学通信教育課程の実践—早稲田大学人間科学部eスクールの取り組み— *メディア教育研究*, 1(2), 45-57.

- 西村昭治 (2007). e-Learningにおける質保証—早稲田大学人間科学部eスクールの取組— *メディア教育研究*, 3(2), 37-43.
- 早稲田大学人間科学部eスクール (2009). 基礎データ <http://www.waseda.jp/e-school/e_data.html> (2009年10月28日)
- 渡辺洋子 (2002). 成人学習時代の成人教育学 明石書店
- 八洲学園大学 (2009). 在学生数・出願状況 <<http://www.yashima.ac.jp/univ/tabid/212/Default.aspx>> (2009年10月28日)



こうご ちはる

早稲田大学人間科学学術院准教授。博士(教育学)(東京学芸大学, 2006年)。早稲田大学文学研究科修士課程(心理学専攻)、同博士後期課程単位取得退学。1990年富山大学教育学部助手、同講師、同助教授を経て、2002年9月より現職。心理学をベースとした教育工学の実践研究に従事。日本教育工学会理事、教育システム情報学会など会員。
ウェブサイト: <http://kogolab.jp>

E-Learning University Corresponding to Adult Lifelong Learning

Chiharu KOGO¹⁾

E-Learning is expected to support lifelong education. One of the e-learning advantages is said to enable learning beyond the constraints of time and place. In this study, the possibility of e-learning is examined to consider how to respond to the needs of lifelong learning in the future. From 30 to 40 generations are the main part of the undergraduate students of the e-learning courses. Their fundamental needs are not just to acquire the knowledge and skills or qualifications, or to get a bachelor's degree, but to discover their own individuality for the second half of life. To respond to this need, it is necessary (1) to support learning basic skills for e-learning, (2) to teach from basic theory to advanced according to their own schedule, (3) the research itself to be linked to the practice field, (4) to provide online communities.

Keywords

lifelong learning, e-Learning, andragogy, bachelor education,

¹⁾ Faculty of Human Sciences, Waseda University